

# 哲学思想の基礎

## 第二部：世界を理解する哲学

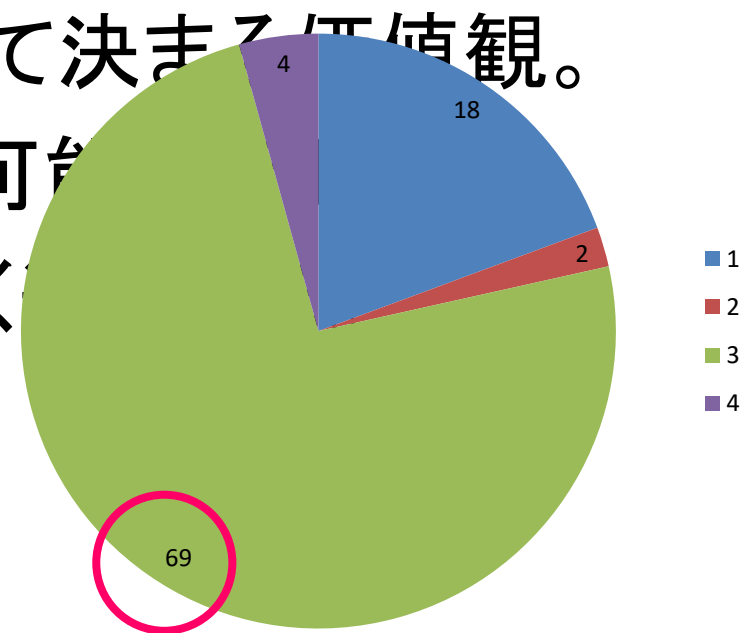
担当：山口裕之

前回の小テスト

# 問1

- 倫理的原理は、どのようなものだと説明したか。

- ① 社会や歴史的状況によって決まる価値観。
- ② 人間にとって容易に実行可能なもの。
- ③ 悪に堕しやすい人間を導くもの。
- ④ 神が与えた普遍的法則。



# 問2

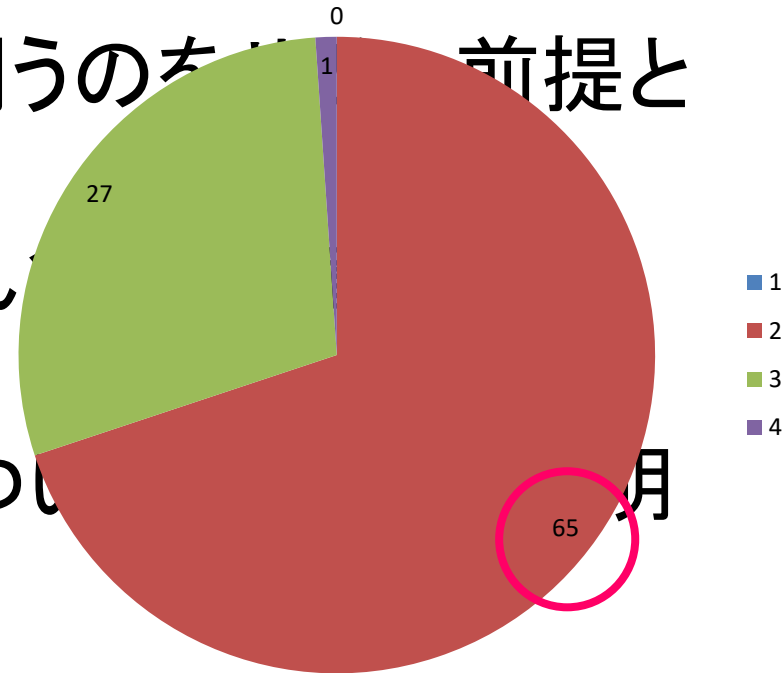
- 科学についてどのように説明したか。

① 不明確な直感を排除して哲学を乗り越えた。

② 不可解な部分をあえて問うのを前提として受け入れた。

③ 自分が当たり前とされていて疑問を問うのを問い直す。

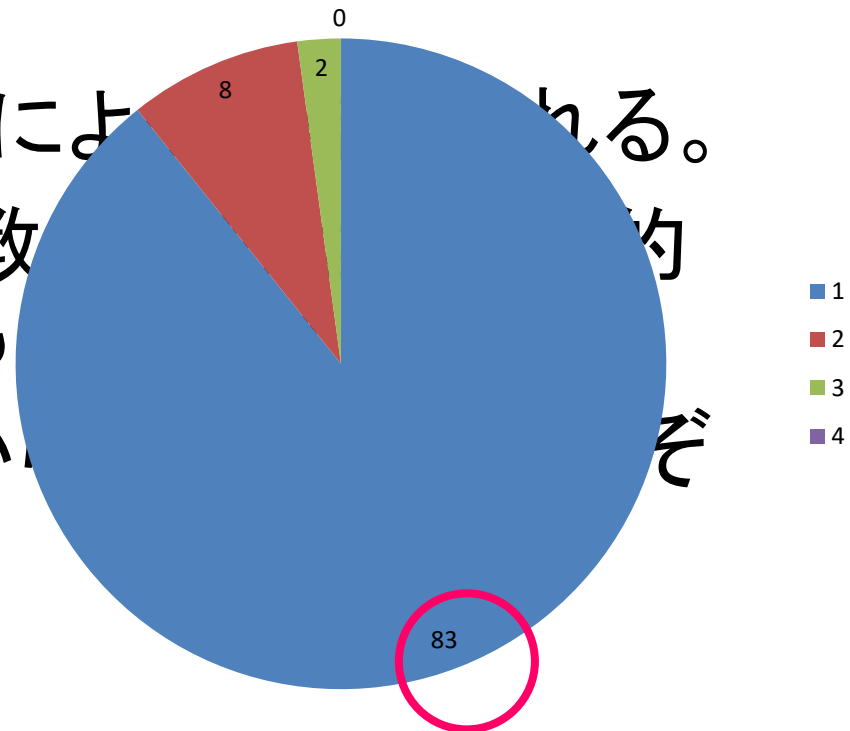
④ 世界が存在する理由について明らかにできる。



# 問3

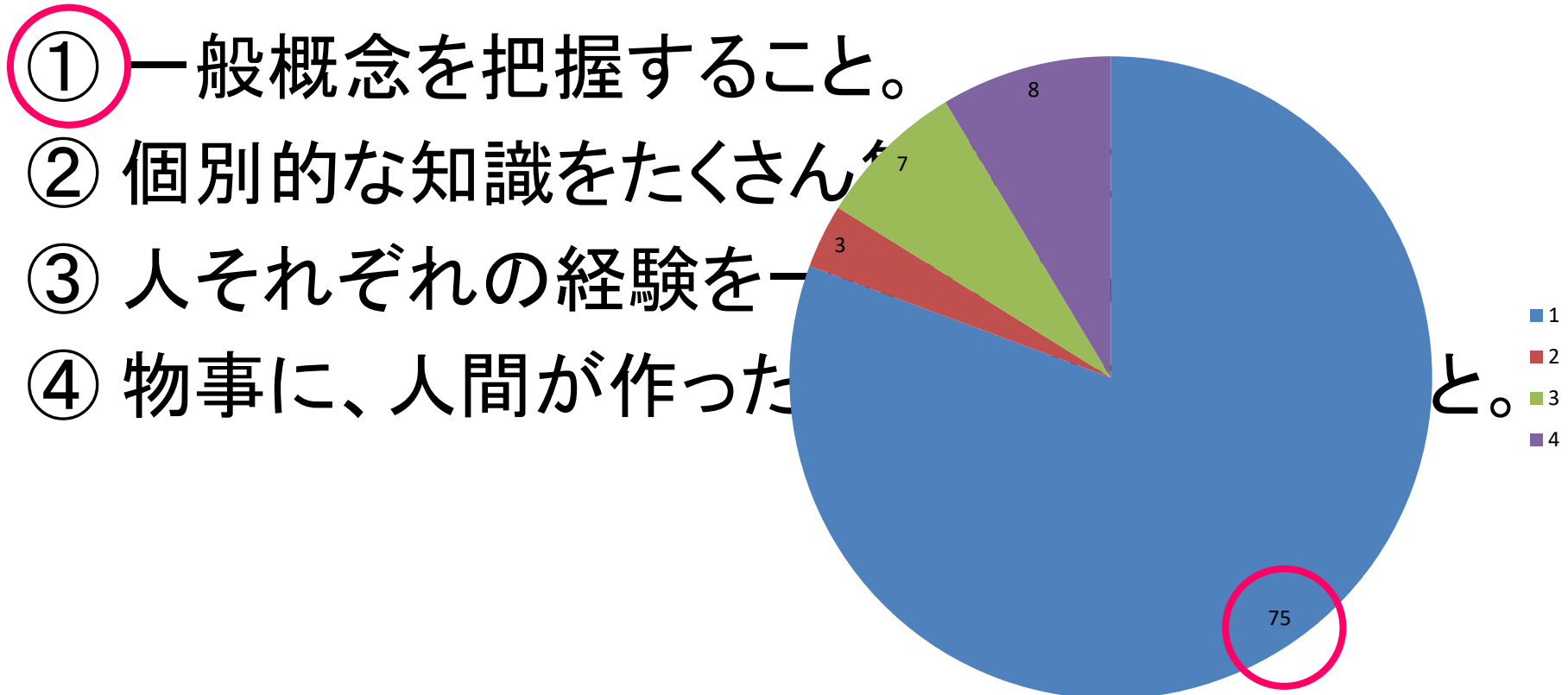
- 体験と論理の関係についてどのように説明したか。

- ① 論理と体験が食い違った場合、体験の方が疑われる。
- ② 論理的な正しさは体験によって決まる。
- ③ 子供が小さいときから教育的に間違っていることでも
- ④ 体験は人それぞれだから



# 問4

- 物事を理解するとはどういうことだと説明したか。



# 問5

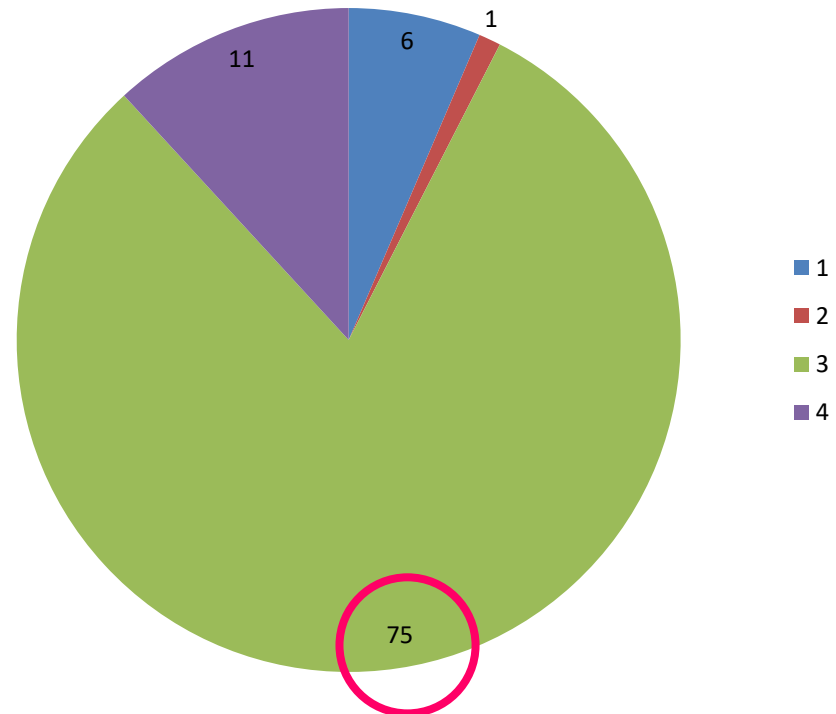
- 理性を英語で言うと、

① Intelligence

② Understanding

③ Reason

④ Intuition



# 問6

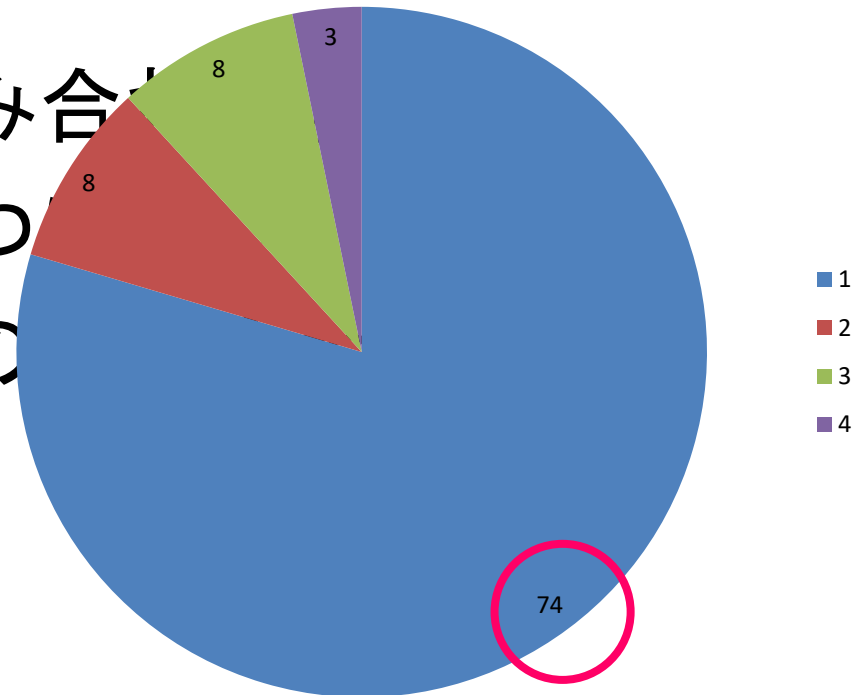
- パルメニデスはどうか。

① 存在は一にして不変。

② 生成変化は原子の組み合わせ

③ アキレスはカメに追いつ

④ 生成変化は地水火風の





# 問7

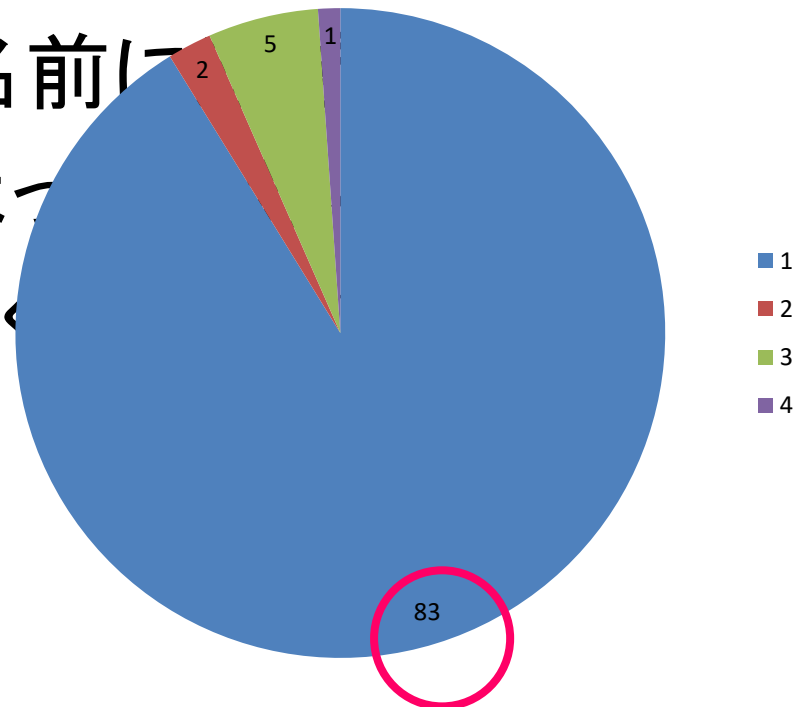
- プラトンはどのように考えたか。

① 生成変化の背後に普遍のアイデアが存在する。

② アイデアは人間が付けた名前だけ。

③ アイデアは人それぞれによって異なる。

④ アイデアは人間にはまったくない。



# 前回の要点

## プラトンのイデア論のもっともな点

- ある物について「それがなんであるか」を人間が勝手に決められない。

＝イデアには現実性realityがある。

## おかしい点

- イデアが個物とは別の実在性existenceを持つとすると、
  - どこに実在するのか？
  - 「第三の人間」という矛盾。

## アリストテレスの存在論

- パルメニデス以来の基本的な問題意識
  - 論理的に考えると生成変化はありえない。
  - 現実には生成変化が満ち溢れる。
  - ◆「言葉と物の関係」と言ってもよいかもしれない。
- プラトンから受け継いだこと
  - あるものについて「知る」とは、「イデア（形相：エイダス）」を把握することだ。
- プラトンの「おかしい点」への対応
  - 形相は個物にある。
  - 個物は、実体 (substance) + 形相 (form)

# 授業コメントへの応答

# 質問は具体的に

プラトンのイデア論がいまいちわからなかった。

- どこまでは理解できたがどの部分がどうして理解できなかったのか、具体的に説明してください。

# 正しさと多数決（ふたたび）

「多数の人がそう思っていること」と「正しいこと」は異なるという言葉に注目したい。これこそが人間が過ちを繰り返す原因であり、民主主義の欠陥部分だからだ。多数の意見が本当に正しいものであるかどうかを吟味することが、民主主義の欠陥を補う対策ではないだろうか。

- その「吟味」は事実と論理に基づかなくてはなりません。
- この点については山口裕之『人をつなぐ対話の技術』を読んでもください。

# 信念と知識

「 $1+1=3$ だと信じている人に、 $1+1=2$ だと納得させることは難しい」と言っていた。そこで私は「正解」と「真実」を区別すればよいと考えた。「 $1+1=3$ だと信じている人」にとっては、それが「正解」だが、客観的には「真実」ではない。

- 通常は、「信念belief: 思い込み」と「知識knowledge: 客観的に正しい知識」とを区別する。
- 「 $1+1=3$ だと信じている人」は、「そう思い込んでいる」ということ。

# アイデアと名前

幼児に「 $1+1=3$ 」と教えることはできないと言っていたが、「2」という概念を「さん」と教えれば、「 $1+1=3$ 」と教えることができるのではないか。

- どういう名前と呼ぶかということと、正しい概念を把握することは別。
- 「いち、に、さん」でなく、「one, two, three」を使っても「同じ数学」ができる。



# アイデアはどこから来るか

我々は「円」を描いたり見たりするが、それらは微妙につぶれていたり、中心がずれていたりする。完璧な円はどこにも実在しない。完璧な円は、頭の中で作られた空間に存在する。

- そのとおりですね。

- しかし、なぜ頭の中に完璧な円のアイデアが実在するのでしょうか？

- そのアイデアはどこから来たのでしょうか？

それが問題です。

# 見えることと存在すること

動物学が成立する以前からあらゆる生物は区別されていた。授業では、生物の違いは見てわかると言っていたが、イモリとヤモリ、タヌキとアライグマなど、見ただけでは区別しにくい生物もある。

- 人間にとって見て取りやすい差異と見て取りにくい差異がある。
  - だから、見間違ふこともある
- いずれにせよ、人間が区別することと、生物自身が種に分かれていることは、別のこと。
  - 分類学は、生物自身がどのように種に分かれているかを理解しようとするのであって、人間が作った区別を押し付けるのではない。

# 要するに、

- あるものについて「知る」ことと、そのものが「存在する」こととは別のこと。
  - これを混同している人が多かった。
  - 後述するデカルト主義がゆがんだのではないかと思われる。
  - 人間の知らないものがまだまだこの世界には存在しているだろうが、そうしたものは発見され区別されるまで存在しないというわけではない。

# 学ぶとは

幼児は親が犬や猫を区別して教えるから、犬や猫を区別できるようになるのではないか。

- 子供に犬と猫の違いを教えるためには、
  - まず子供の側で「犬と呼ばれるべきもの」と「猫と呼ばれるべきもの」が区別され、
  - そのうえで、それぞれに「犬」や「猫」といった名前があてがわれるという順序でなければならない。
- 「教育」とは刷り込みではなく、教えられる側の主体的な理解に依存している。
- このあたりの詳細は、山口裕之『人間科学の哲学』を読んでください。

# 形相と遺伝子

卵のときにニワトリの形相はどこにあるのかが問題だと言っていたが、卵の中にある。それは、遺伝子として卵が持っている。

- 遺伝子概念が登場するのは20世紀に入ってからです。
- とはいえ、アリストテレスの理論が遺伝子理論と同じ構造だという説はあります。
- このあたりの詳細は、山口裕之『ひとは生命をどのように理解してきたか』を読んでもください。

# 多様な呼び方

冷凍コロッケや冷凍チャーハンは、「コロッケ」「チャーハン」のアイデアを持っているが、「冷凍食品」というグループに入れることもできる。

- 「まずい-コロッケ」というものもあります。
  - その「コロッケ」がたまたま、まずい。
  - 「まずいコロッケ」という「種類」はない。
- しかし、「コロッケ」は「コロッケという種類」を規定している。
  - 「ジャンル:冷凍食品・種:コロッケ」という構造。
  - 「Substance-Form」と同じように、「ジャンル-種」という構造で、個体が成立している。

前回の小テスト

# 問1

- 哲学は何を問題にしているのか。
- ① 人それぞれに考え方が違うのに、どうすれば普遍的な科学的認識が得られるか。
- ② 一見すると簡単なことを深く考えると謎が見えてくるのはなぜか。
- ③ 論理的に考えると生成変化は存在しないはずなのに、この世界には生成変化があふれているのはなぜか。
- ④ 論理的に考えると不変のものは存在しないはずなのに、この世界には不変のものがあふれているのはなぜか。



## 問2

- 「質問の三要素」として言っていないのはどれか。
  - ① 自分なりの感想。
  - ② 質問する理由。
  - ③ 自分なりの解答。
  - ④ そう解答する根拠。

# 問3

- この授業ではこれまで「正しさ」とは何だと説明しているか。
  - ① 社会的に認められていること。
  - ② ある人が正しいと信じていること。
  - ③ 論理的に筋が通っていること。
  - ④ ある人が学んで知ること。

# 問4

- プラトンのイデア論について正しいのはどれか。
  - ① プラトンは人間が名づけることでイデアが形成されると考えた。
  - ② プラトンは素材にイデアが取り付くことで個物が生成すると考えた、
  - ③ プラトンはイデアは個物に内在すると考えた。
  - ④ プラトンはイデアは個物とは別のものとして実在すると考えた。

# 問5

- プラトンのイデア論のもっともらしい点はどこか。
  - ① あるものがなんであるかについて、人間が勝手に決めることはできない。
  - ② あるものがなんであるかは、人間の理解によって変わる。
  - ③ 人間は初めて見たものについて、それがなんであるか分からない。
  - ④ イデアはこの世界とは別の世界に実在する。

# 問6

- アイデアが個物とは別に実在すると仮定すると、どんな困難が生じるか。
  - ① アイデアと個物を「同じ」とみなすための別のアイデアが必要になり、無限後退に陥る。
  - ② 第三の人間から見ないと、アイデアが正しいかどうかわからなくなる。
  - ③ アイデアが個物に内在するという事実と反する。
  - ④ 個物を見るとアイデアが見て取られるという事実と反する。

# 問7

- アリストテレスは、プラトンのイデア論の難点を克服するためにどう考えたか。
  - ① イデア（形相）は個物にある。
  - ② イデアは、イデア界ではなくこの世界のうちで個物とは別の場所にある。
  - ③ イデアは実在せず、個物しか実在しない。
  - ④ イデアは人間の頭の中にある。

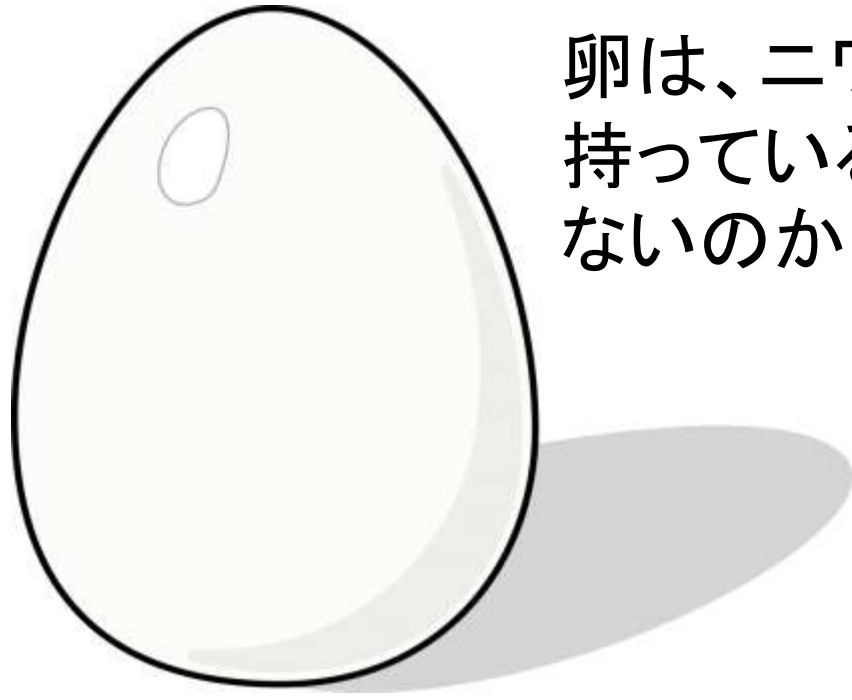
では、前回の続きから。

# アリストテレスの存在論

- 普遍の要素の組み合わせによって、「生成変化」を説明しようとする。
- 「生成変化」の典型的な例として、生物と工作物を念頭に置いている。
- そういう「生成変化するもの」についての理解は、単に「イデア」を把握するだけでいいのか？

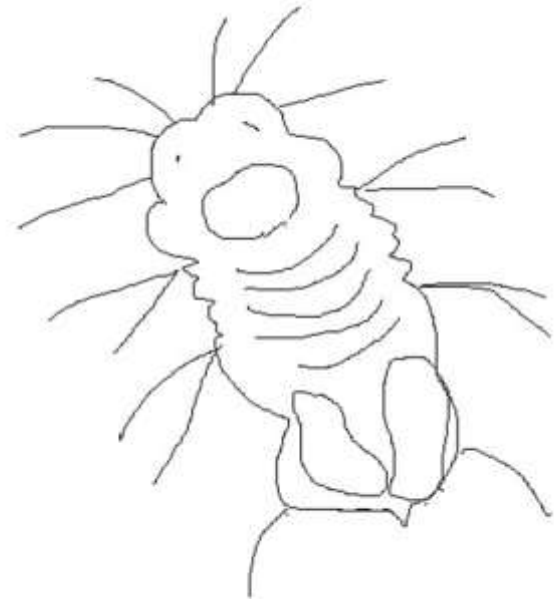


# たとえば、



卵は、ニワトリの形相を  
持っているのか持ってい  
ないのか？

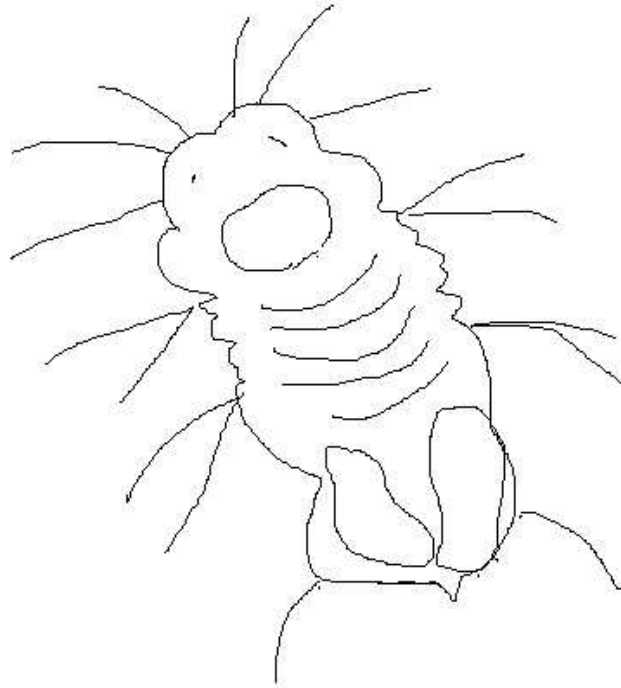
なんじゃこりゃ??



# 目に見えるものがすべてではない

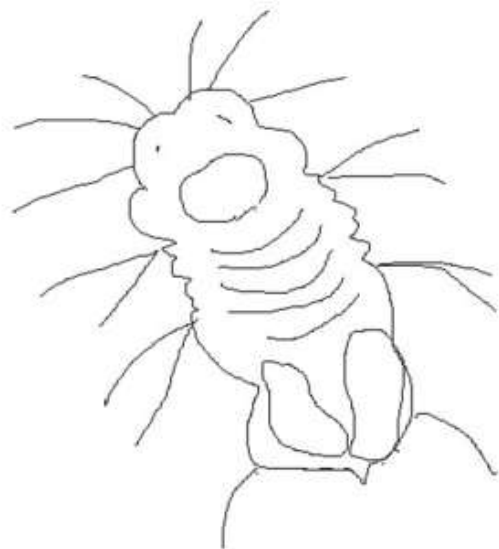
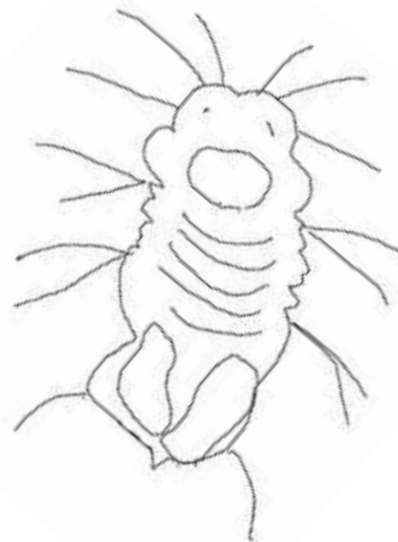
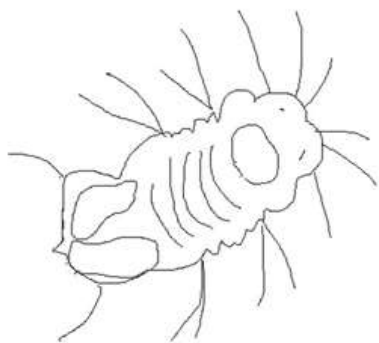
- 卵は、現状では卵の形相が「**現実態**」として表れているが、ニワトリの形相を「**可能態**」として持っている。
  - 可能態 : dynamis (=capable) → potential
  - 現実態 : en-ergeia (=in-action) → actuality
- 現実態と可能態の理論
  - **生成変化**の説明 : 卵はニワトリではないが、ニワトリにしかない。
  - **物と感覚**の説明 : 物は、人間が見ていないときにも、人間がもしそれを見たらそのように見える形を持っている。
  - **人間の能力の説明** : 英語ができる人は、英語をしゃべっていないときにも、その能力を持っている。

# 他の何にも似ていないものの理解



- *Limnognathia maersk*という名前です。
- ...はあ、そうですか。

だって、見たら同じってわかるでしょ。



はあ...？

- 貝やイカ、タコ(軟体動物門)、回虫(線形動物門)プラナリア(扁形動物門)などが属する「旧口動物」の一つです。
  - 「旧口動物」とは、原腸陥入部がそのまま口になる動物群です。
  - 人間など脊索動物門では肛門になります。
- 一つの門(微口動物門)に一つの種しか属していません。
  - 「門」とは、「動物界・植物界・菌界・原生生物界」という生物分類の古典的な最大項目のすぐ下に来る分類階級です。(界-門-綱-目-科-属-種)
  - ちなみに「脊椎動物」は「脊索動物門」より下位の「下門」。
- ああ、なるほど。

# 要するに、

- 知識は、体系の中に置かれてはじめて「意味」が分かる。
- 学問の体系
  - それぞれの学問は対象となる領域を前提とする。
    - 自然学なら運動変化、天文学なら天体、生物学なら生物、など。
  - その分野に属する様々な知識は、「原因-結果」の関係によって結び付けられている。
  - それぞれの分野は、最初の原因へと探求する。

# 「原因」と言っても四種類ある

たとえば、「家がある」ことの原因は、

- 質量因 : causa materialis
  - レンガや材木。
- 形相因 : causa formalis
  - 雨風をしのぐ屋根と壁、出入り口、床などが備わっている。
- 始動因 : causa efficiens
  - 大工さんが働く。
- 目的因 : causa finalis
  - 雨風をしのいで住む。

# この世界の第一原因の探求

- 諸学問はそれぞれの領域で「最初の原因」を探求。
- 形而上学 (Meta-physica) は世界の第一原因を探求。
  - この世界には運動変化が常にある。
    - たとえば、天体は常に円運動をしている。
  - 運動には必ず原因があるはず。
    - その原因をさかのぼっていくと、第一原因に至る。
  - 第一原因は、最初の原因なのだから、他の原因によって動かされていない。
    - つまり、自らは動いていないが、他のものを動かすようなものでなくてはならない。
    - 他の運動の目的となるようなもの。

→ 目的論的な世界観。



# アリストテレスの哲学

- 世界を理解しようとする哲学。
  - 生成変化するものに、普遍で不変な概念(イデア・形相)を当てはめる。
  - 個物は、substance + formとして実在する。
  - 生成変化を、原因-結果の体系で整理する。
  - 第一原因として「神」がある。
  - 世界は、本来的なあり方が実現していく過程。
- 12世紀以降、アリストテレスの哲学とキリスト教神学の統合が西洋思想の中心課題に。
  - いわゆる「スコラ学」。

次回は、デカルトによる転換と  
その後の展開